

## 二十一世紀と『法華経』

蔣忠新

大江平和 訳

尊敬する諸先生方：

本日、私共は晴れやかな気持ちを胸にこの場集いあい、『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』が首尾よく出版の運びとなったことを盛大にお祝い申し上げます。これは実に意義深い出来事であります。このたび、尊敬する主催者より『二十一世紀と「法華経」』というテーマで記念講演をするようにとの要請がありました。まことに光栄に存じるとともに、非常に恐縮しております。しかしながら、中国の二つのことわざ、すなわち、一つは「盛情難却」

（厚情は断りにくい）もう一つは「恭敬不如從命」（うやうやしく命令に従った方がよい）という言葉が頭に浮かびましたので、私は浅はかな見解をつつみかくさず、あえてここで若干の考えを述べさせていただきます、諸先生方にご意見とご教示を請う次第であります。

この『二十一世紀と「法華経」』というテーマは、未来を展望するという性格を有しています。私個人の考えですが、歴史を振り返り、現状を考察することは、正確に未来を展望する上での有効な手段であります。一般的に言って、歴史を振り返ることによって、おびただしい

仏教経典の中で『法華経』が、世界で最も長期にわたって

伝播し、最も広範に流布し、最も数多くの信仰者と研究者を有する経典であり、まさに「経中の王」であることがわかります。また、一般的に、現状を考察してみれば、現代の世界にあって最も大きな影響を及ぼし、しかもますます広がりを見せている仏教経典もやはり『法華経』であることがわかります。ゆえに、未来を展望するとき、我々は、確信をもって「間もなく迎える二十一世紀において『法華経』は全世界に広まっていくであろう」と予見することができるとあります。

私がこのように申し上げるのもただ一つの根拠にもとづいています。すなわちそれは、客観的に存在する事実であります。私自身は無宗教、無党派であり、ただ「実事求是」を指導方針として実践している平凡な一研究者にすぎません。先に述べた結論に説得力をもたせるために、私が根拠とする事実を簡単に紹介させていただきたいと思っています。

も広範囲にわたり、長きにわたって影響を及ぼした仏教経典であるということがあります。

『法華経』が古代西域に伝わったあと、古代西域仏教史においても最も広くかつ長く影響を及ぼした仏教経典となりました。それは、古代西域といわれた地域から今日までに出土した梵文『法華経』写本の数が最も多く、発見地の範囲も広く、版本の複雑性、書写された年代が時間的に長期にわたっているという事実等の面からみても他のいかなる仏教経典も比較にならないからであります。たとえば、古代西域といわれた地域において今までに発見された『金光明経』の梵文写本は極めて少量であります。

『法華経』の最初の漢訳本は、三国時代の呉国に出現しました。その名は『仏以三車喚経』というものです。訳者は月支から来た優婆塞（或いは「居士」、或いは「在家者」）で、名前を支謙と言いました。今では、漢訳された『法華経』の完訳本や抄訳本は、少なくとも八つあり、その中の三つの完訳本と一つの抄訳本は今尚現存しています。鳩摩羅什が紀元四〇六年に長安で翻訳した

## (一) 歴史を振り返って

『法華経』の起源はインドにあります。古代インド文化は、記実文献に乏しいという特徴もあって、『法華経』のインド仏教史上における影響はどのようなものであったのか、というような問題に対して、確かに具体的かつ詳細な回答を与えることはできません。しかし、現存する他のいかなる仏教経典の梵文写本と比較しても、『法華経』写本には、極めて明瞭、かつ唯一無二の次のような特徴があります。第一に、現存する梵文『法華経』写本の数量が最も多いこと。第二に、現存する梵文『法華経』写本の発見地が最も多く、それらがカバーする地域が最も広大であること。第三に、現存する梵文『法華経』写本の間における、言語、構成及び文章の長さ等の面での違いが最も複雑であること。第四に、現存する梵文『法華経』写本の書写された期間が最も長く続いているということ等であります。これらの特徴を総合的に研究すれば、我々は確かな結論を導き出すことができます。すなわち、『法華経』はインド仏教史上において最

『妙法蓮華経』は、『法華経』の七番目の漢訳本であります。この訳本がひとたび世に出ると、それまでの全ての漢訳本にとって代わり、その後、紀元六〇一年に出現した八番目の漢訳本、即ち『添品妙法蓮華経』は、事実上、何の役割もはたしませんでした。要するに、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』は、『法華経』が中国や日本を含む東洋全体へ伝播する上で決定的な役割を果たしたのであります。

『法華経』が、中国仏教史と中国文化史において、及ぼした影響は極めて広く、深く、長いものでした。特定のある一つの時代、ある一つの場所を取り上げて、詳しく紹介することはできませんし、またその必要もないと思います。ここでは、私自身が、比較的注意事项を払い、研究するに値すると思う問題だけを挙げてみたいと思います。(1) 全体的にみると、『法華経』は中国に最も大きな影響を与えた仏教経典であり、このような影響は鳩摩羅什が翻訳した『妙法蓮華経』によってもたらされたものであります。現存する漢訳仏教経典の古写本の数量についてはいまだに厳密な統計ができていない状況ですが、

我々は少なくとも、漢訳『法華経』は、最も古写本の多い漢訳仏教経典の一つであるということが出来ます。しかも漢訳『法華経』の古写本の中では、間違いなく鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』が絶対的多数を占めています。少し前になりますが、私は、現存する最古の木版本の漢訳仏教経典もやはり『妙法蓮華経』であることに気がつきました。聞くところによれば、その刊行された年代は、(則天武后が政權を握っていた) 武則天周朝の中期、すなわち紀元六九五年から六九九年より前の時期であったはずだということです。これは、以前に最古のものであると公認されていた、唐時代の咸通九年、すなわち紀元八六八年に刊行された『金剛経』の木版本よりも約百七〇年古いものであります。<sup>(注)</sup>(2)『法華経』の中国に対する影響の大きさは、梁の慧皎によって書かれた『高僧伝』等の中国仏教史に関する古典籍や、古代中国人の手になる『法華経』を説明、解釈したおびただしい著作をもつて考察することが出来ます。概括的な表現をすれば、隋、唐以前において、『法華経』は中国仏教史の翻訳と講釈の段階にありました。この段階において、中国仏教

には、学派或いは学説しか存在せず、宗派はまだ出現していません。『法華経』の学説を中国に広める上で最大の貢献をしたのは間違いなく鳩摩羅什でありました。隋、唐時代から中国の仏教は宗派創設の段階に入りました。この段階において、『法華経』を中国に広める上で最大の貢献をしたのが天台宗の創始者である智顗であります。天台宗は『法華経』を宝典とし、法華宗とも呼ばれています。智顗がなぜ『法華経』を中国に広める上で画期的な貢献ができたのかということについては、おそらく多くの原因があったと思います。私個人の浅見によれば、その根本的な原因は、彼が『法華経』の教義に対して頑な教条主義的態度をとることなく、『法華経』の教義の精髓を当時の中国の国情と結びつけ、『法華経』の教義に対して正しく明快で、統一を必要としていた当時の中国社会の国情に叶った解釈をしたところにあります。『法華経』の統一思想は、中国伝統文化における「大一統」という概念を強めました。その影響の深遠さは今もって推し量ることができず、特に注目し値する点であります。(3)古代中国の民間において、ないしは現代

中国の民間において、『法華経』が中国社会にもたらした影響の大きさは、大慈大悲、救苦救難の観音菩薩への敬虔な信仰の面で際立って表れました。中国の多くの所で、いずれも「法華寺」という名の観音菩薩だけを供養する仏教寺院が造られたことがあります。観音信仰はすでに中国の民俗の一つの重要な構成部分となっています。要するに、『法華経』は中国文化の発展に対してゆるがせにできない重大な役割を果たしたわけです。もし中国の「法華文化」を研究しなければ、中国文化を全面的にまた深く立ち入って理解することはできないのです。

歴史上、『法華経』は他にもチベット語、ウイグル語、西夏語、モンゴル語に翻訳されました。これらの言語を使用する民族の文化に対しても同様に重要な影響を及ぼしました。この分野の事情については、私の知るところは甚だ限られたものですので、省略させていただくことをお許し願いたいと思います。

『法華経』はまずインドから西域に伝わり、続いて西域からシルクロードを経て中国に伝わりました。そして、

早くも紀元七世紀には、ついに朝鮮半島を経て中国から貴国日本へと伝わり、西から東へのルートを進んだわけです。その道に詳しい皆様方の前で、身の程知らずと言われないように、再度、省略させていただくことをお許し願いたいと思います。

## (二) 現状を考察して

現在、世界的な範囲で見ますと、貴国は『法華経』を信仰し、実践し、研究する中心であります。しかも創価学会は、貴国において最大の『法華経』を「中心経典」とする仏教団体であります。『法華経』の現状を考察しようとするならば、『法華経』の貴国における現状を考察しないわけにはいきません。そして、『法華経』の貴国における現状を考察しようとするれば、まず創価学会の現状を考察しなければなりません。

ここまで述べたところで、私は厳肅に次のことを言明しなければなりません。それは、私の知るところによると、貴国には多くの『法華経』を「中心経典」とする仏教団体があり、これらの団体の間には論争があるかと思

いますが、私は完全に超越した立場を堅持しており、絶対にそれらに介入するつもりはないということです。私個人がこの度、創価学会と協力プロジェクトを行った趣旨は、梵文『法華経』に対する学術研究を促進し、中国及び日本の両国人民の間の理解と友誼を深めることにあり、この協力プロジェクトが成功した基礎となったのは、平等をうたい、信義を重んじたことにあります。

実際、この度の決して短くはない時間を費やしながらかも大変にスムーズに運んだ協力プロジェクトを通して、自ら創価学会の会員と仕事上のやりとりを通して、私はようやく創価学会に対していくらかの認識を得たと思っています。ゆえに、私の創価学会に対する理解は、完全に事実と経験の基礎に立脚したものであります。例えば、私は創価学会が世界平和事業のために極めて大きな貢献をしたと理解していますが、その主な根拠は以下に述べる事実であります。すなわち、(1)創価学会の初代会長牧口常三郎氏は、日蓮の死身弘法の精神を継承、宣揚し、平和を守るために全面的に日本国の軍部のファシズムと戦い、ついには牢につながれ、その身を以て殉教さ

れたことを示しています。わずかにこれら事実を挙げるだけでも、私が先程述べたこと、すなわち、私の創価学会に対する理解は、完全に事実と経験の基礎に立脚したものであることをすでに余すところなく証明しています。おそらく私の創価学会に対する理解はまだ非常に浅はかなものであると思います。しかし、現代の世界にあって創価学会のような『法華経』を「中心経典」とする仏教団体が、今まさにどのようにして『法華経』の奥義を探究し、明らかにしようとしているのか、またどのようにして『法華経』の智慧を活用して現代世界が直面している問題群への答えを導こうとしているのか、そして、どのようにして、『法華経』を中心とする仏教哲学を速やかにかつ広範囲に世界各地に広めようとしているのか、創価学会に対する理解は、確かに私の視界を開かせ、それらを目の当たりにさせたのであります。

『法華経』を中心とする仏教哲学を世界の各地へ迅速にしかも広範囲に広めていくSGIの活動には、誰もが認めるべき代表性があることに思いを致しつつ、私の『法華経』の現状に対する考察はとりあえずここで一段落さ

れたこと。(2)創価学会第二代会長戸田城聖氏は、平和を守るために、国内外の巨大な圧力にも屈せず、一九五七年九月八日、歴史的意義を有する「原水爆禁止宣言」を発表したこと。(3)創価学会第三代会長池田大作氏も、同様に平和を守るために、国内外の巨大な圧力にも屈せず、一九六八年九月八日、中国との友好交流を提唱し、一九七四年から一九九二年までに中国に対して八回にわたって公式友好訪問を行い、中日友好交流に対して際立った貢献をしたこと。(4)池田SGI(創価学会インタナショナル)会長は、宗教、文化、民族的心理等の面におけるさまざまな違いを乗り越え、一九七二年、イギリスの著名な世界文化史学者トインビー博士との対話から始まり、絶えず世界各国の指導者や文化界の代表的な名士と広い範囲で対話を続け、すでに二十五年にわたっていること。そして、世界恒久平和の基礎を磐石なものにするため、高く評価されるべき努力をはらったこと。(5)一九八三年八月、池田SGI会長は「国連平和賞」を受賞されたこと。この歴史的イベントは、氏が人類平和の事業のためになされた貢献が世界人民から十分かつ高度な称賛を

せ、人類の現在がかかっている問題に目を転じたいと思います。

人類社会の発展の歴史からみると、世界全体は今まさに一体化の方向へ向かって進んでいます。にもかかわらず、世界一体化への実現は決して順風満帆なものではなく、必ずや予測しがたい、非常に複雑で長い道を経ることになるに違いありません。実際、二十世紀の人類が未来を展望するとき、十九世紀の人類のように樂觀的で自信のあるものではありません。何故ならそれは人類が今まさに多くの世界的な危機という深刻な挑戦を受けていることをすでに感じ取っているからであります。あらゆるこれらの世界的な危機には一つの共通点があります。それは、全地球性と総体的性であります。共通の危機に直面した人類は、すでに少しずつ民族、国家や地域を超えた人類の共通の利益を意識するようになりました。少しの誇張もなく言えば、人類のすることなすことすべてが、すでに二十世紀末の人類をして文明の岐路に立たしめているのであります。人類はまず人類共通の、根本的な利益を守ることを出発点としなければなりません。

ん。そして共通の努力を通じて、希望を求め、方向を見つけ、活路を明らかに認識し、確信を打ち立ててこそはじめて二十一世紀において順調に前に向かって進むことができるのであります。

私個人の考えとしては、すべての全地球的問題を解決する鍵は、二つの大きな問題进行处理することにあると思います。すなわち、一つは、人と人との間の関係の問題であり、もう一つは、人と自然との間の関係の問題であります。言い換えれば、平和と発展という二つの大きな問題であります。そしてこの二つの問題の中で、平和の問題はより重要であります。なぜなら、平和は発展のための保障であり、平和がなければ、発展を遂げることも不可能であります。ゆえに、我々は、平和問題は人類が直面しているすべての問題の中で、最も緊急かつ最も重大な問題であると言わねばなりません。発展については、我々は、世界平和の発展に資するような、或いは人類共通の繁栄に資するような発展を主張していかねばなりません。

疑問の余地なく、平和と発展という二つの大きな問題

をうまく処理しようと思えば、我々は世界各国人民の長期的な、揺るぎない共同の努力に依存しなければなりません。国連はすでに環境、人口、食糧、世界平和、社会発展等の問題をテーマとしてそれぞれに国際会議を開催しています。地域的な国家組織も様々な形式で、その地域がともに関心を寄せる、例えば、非核地域をつくるといった類の様々な問題を頻繁に討論しています。このような努力は確かに十分に必要であり、重視するに値するものであります。しかし、ただ各国政府と国連の努力だけでは不十分です。同様に、更なる必要性があり、重視するに値するのは、世界各国人民の、各国の民間の有識者と非政府の民間組織からなる力であります。なぜなら、歴史はすでに、人類文明を創造する主体者は人民大衆であることを証明しているからであります。人類文明の希望はすべて人類文明の創造者である人民大衆の中にあるのです。そして世界の平和、人類の統一はさらに各国人民の心の中に埋もれている共通の、そして最大の願望であります。私のこの判断は全く根拠もなく思いついたものではありません。ここで一つの例を挙げてその根

拠についてご説明しても差し支えありません。民族・国を超越した一つの言語としてエスペラント語はすでに国際補助語となつています。現在エスペラント語を理解する人数はすでに一万人を超えており、エスペラント語で翻訳、執筆された作品も数多く、さらにはエスペラント語だけで出版された刊行物やエスペラント語だけで放送する放送局まであります。私はここでエスペラント語を広めようとしているわけではありません。私自身はエスペラント語に対して全く無知であり、エスペラント語関係者となら接触があつたわけでもありません。私が関心を寄せているのは、なぜこんなにも多くの人々が絶えず時間を費やして、私個人からみるとほとんど実用性をもたないようなエスペラント語を学習したり使用したりするのであるのか、という問題であります。果してこれが深く考えるに値しない問題だといえるでしょうか。

私個人は、エスペラント語運動は、人類が世界平和と世界主義に対して間違いなくある共通の感情、理想や信念を持っていることを余すことなく物語っていると思います。そしておよそ人類が世界平和と世界主義に対して

抱くこのような共通の感情、理想や信念を表現し、奮い立たすことができる運動は、必ずや各国人民の普遍的な歓迎をうけるにちがいません。この面において創価学会が提唱する『法華経』を「中心經典」とし、仏法を基調とした平和・文化・教育運動が、全世界で迅速かつ大規模な発展を遂げたという事実は、非常に説得力をもつ一つの証拠であります。池田SGI会長の遠大なご見識は、中日友好交流の重要性に対して鋭い洞察力と予見力を備え、中日友好交流の絶えざる推進のために、並々ならぬ努力を払われました。一九七四年から一九九二年までに氏は自ら八回の多きにわたって中国を公式訪問され、中国人民から広く熱烈な歓迎を受けました。中国の北京大学、復旦大学、武漢大学、深圳大学、厦門大学及び新疆ウイグル自治区博物館はいついで「名誉教授」の称号を授与しています。中国社会科学院は「名誉研究教授」の称号を授与し、新疆大学は、「名誉学長」の称号を授与、旅順博物館は「名誉館員」の称号を授与しています。また、中国人民对外友好協会・中日友好協会は、「平和友好杯」を授与、中国文化部は、「中国芸術貢

献賞」を授与、中日友好協会は「平和の使者」の称号を授与、中国人民対外友好協会は、「人民友好の使者」の称号を授与しています。また、北京と上海と新疆ウイグル自治区では相前後して池田SGI会長の写真展を開催しました。池田SGI会長の著作の中国語版は中国大陸ですでに二十種類余り出版されています。上海市地下鉄の駅のホームには池田SGI会長の語録の看板が出現しました。とりわけ特筆すべきことは、一九七四年十二月、故周恩来首相と当時創価学会会長であられた池田先生との会見が歴史的意義を持つものであったことです。このことは、世界の平和は全人類の根本的利益であり、世界平和を求めるために払われる努力は人類の希望を代表するものであり、必ずやあらゆる違いを乗り越えて社会の中で最も幅広い歓迎を受けることができることを余すところなく説明しています。

### (三) 未来を展望して

歴史を振り返り、現状を考察したその基礎の上に未来を展望したとき、私が固く信じていることがあります。

それは、『法華経』自体の中に包含されている平等の概念、慈悲の精神、統一思想、そして深遠な智慧により、『法華経』が二千年余の長きにわたって広大な地域で形成された多大な影響力により、また『法華経』が今日多数の信仰者と多数の研究者を引きつけていることにより、そして、とりわけSGIが『法華経』の精神を現代の特徴をふまえ、人民の願いにかなった形で明らかにし、ゆるぎない確信と驚嘆すべき実践で全世界の人民の平和、文化及び教育事業のために傑出した貢献をしたことによつて、『法華経』は二十一世紀において間違いなく全世界人民の中に広く、深く流布していくであろうということでもあります。そして、新たな『法華経』研究の上げ潮も必ず二十一世紀においてその出現をみるであろうということでもあります。

創価学会が『法華経』写本出版に関する計画を明らかにしたことは、この『法華経』研究の上げ潮が実際にはすでに始まっているということでもあります。このほど出版したばかりの『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』は、間違いなく『法華経』に関心

を寄せるすべての学者たちから重要視されることでしよう。なぜならそれは、十九世紀中葉から現在まで、世界各国の学者による『法華経』写本の研究はちょうど一世紀半を経ているわけですが、今までにこの本の中で公表されているような、鳩摩羅什が翻訳した『法華経』の原本と同年代のものであることを証明するような現存する最古の梵文『法華経』写本を目にすることがなかったからであります。鳩摩羅什が大乗仏教を広める上で果たした貢献の大きさは、時代を画するものであり、古代において彼に匹敵する者はおられません。彼が当時のインドの仏教経典と仏教以外の経典に対して、全面的で系統だった研究を行ったこと、また、仏教経典を翻訳する以前から、彼は当時の仏教内外の様々な教義についてもたなごころを指すように明らかったこと、彼が計画的に、そして、最も適した漢語を用いて仏教経典を正確に翻訳することができたことにより、彼の翻訳になる仏教経典は、最も速やかに、最も広く、最も長きにわたって流れ伝わったのであり、なかならず最も多くの読者を引きつけたのが『妙法蓮華経』でありました。中国天台の『法華

経』学、日本の日蓮が用いたのも鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』でありましたし、近代になって、創価学会初代会長牧口常三郎氏が発表した『価値論』の核心、第二代会長戸田城聖氏が獄中で悟った経典も『妙法蓮華経』でありました。そして現在、池田SGI会長が日蓮の『法華経』講義である『御義口伝』をもとに、『法華経』の智慧を活用し、人類が幸福を獲得するための活動を展開されています。ゆえに、二十一世紀に向かう『法華経』研究にとって、創価学会『法華経』写本出版計画の第一歩として、『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』が出版されたことは、確かに極めて深い意義をもつものであり、必ずや幅広い熱烈な歓迎を受けることでしょう。

最後に、私は、『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』という本の編者として、この場をお借りして共同で私にこの本の編集を委託して下さった創価学会、東洋哲学研究所及び旅順博物館に対して重ねて謹んで衷心より御礼申し上げます。そして、私に限りない激励をしてくださった池田SGI会長と恩師で

ある北京大学教授季羨林博士に重ねて謹んで心からなる感謝を捧げる次第です。また、最大のご助力を賜った戸田宏文教授に重ねて謹んで心から感謝申し上げます。私が拝読したことがあるすべての梵文『法華経』研究の論文、著書の執筆者の方々に重ねて謹んで心から感謝申し上げます。様々な形で私に励ましと援助を与えてくださったすべての方々に重ねて謹んで心から感謝申し上げます。

たいへんありがとうございました。

註

潘吉星著『印刷技術の起源は中国か、韓国か』（一九九六年十一月十七日付『中国文物報』第四十四期第二、三면、北京所収）を参照されたい。

（しょう・ちゅうしん、中国社会科学院教授）  
（訳・おおえ へいわ）

（本稿は一九九七年四月八日に行われた当研究所主催の特別公開講演会での講演原稿です）